

B. 自由研究

日光におけるニホンザル地域個体群の構造と環境利用

小金沢正昭(栃木県立博物館)・東英生
(野生動物保護管理事務所)

本研究は、冷温帯・非多雪地のニホンザルを対象に、1) 地域個体群を構成する各集団の動態と集団間の社会的な相互関係、2) 各集団の移動様式と行動圏形成に係る要因の解析を通して、ニホンザルの地域個体群の実体を把握することを目的とする。これまでの調査から、当地域に生息するニホンザルは、その集団サイズと構成によって、群れ・オスグループ・単独個体の3つに分けることができ、このうち群れについては8群が連続して分布していることが明らかとなっている。

そこで、本年度は、当地域の西側に位置する3群(A・B₁・B₂群)の生息地を集中調査地として、冬季の調査をおこなった。調査は、移動様式に関する資料をえることと集団の識別を容易にするために、それぞれの集団に所属する個体を捕獲し、テレメトリー法による追跡と観察をおこなった。

現在、53.85AM(オスグループ)・53.90AF(A群)、53.95AM(B₁群)と53.80AM(単独個体、昨年度捕獲した単独個体=50.14AMの再捕)の4頭を同時に追跡している。また、カウントにあたっては、一定の信頼度を得るために、比較的開放的な場所でのくりかえしのカウントを実施している。

その結果、群れサイズは交尾期(12月まで)とその後では主に成獣オスの減少に伴う変化があることが明らかとなった。一方、テレメトリー法による単独個体の追跡から、単独個体は交尾期に群れ(A群)に接近し、群れとあまり離れていない場所で成獣メスと2頭だけであるのが観察された。ここでは、この集団を「ペア」と呼ぶこととする。その後の観察ではペアは見られず、交尾期に見られる一時的な集団であると考えられた。

地域個体群を構成する各集団間の相互関係については観察が充分ではないが、群れと群れの関係について見ると、多くの場合、日々の移動地点は一定の間隔で離れており、群れどおしの出会いは少なく、その結果として形成される行動圏は多少

重複する程度であった。しかし、今回、A群とB₁群のほぼ一週間におよぶ接近は、一定の間置きは見られるものの、行動圏は大きく重複し、土地の環境と行動圏の形成を考えるうえで、大きな課題となった。

下北半島北西部ニホンザルの採食行動における性差・年齢差

綿貫 豊(北大・農)

前年度の下北半島北西部・M群の冬期間の研究では、0-1才は細い枝をよく利用し芽食いの頻度が高く、オトナは細い枝はほとんど利用せず樹皮食いをよく行い、性・年齢による体重の差が利用できる採食空間を制限していると推定された。本年度は、体重による制約のもとで各年齢クラスは異なった採食戦略をとっているとの立場に立って、83年12月から84年3月までM群を連続追跡し、特にヤマグワでの採食行動を調査した。

本調査地で最も選好される餌のひとつであるヤマグワは、シーズン初めに芽が食われ後半に樹皮が食われた。これは芽の方が樹皮よりも“良い餌”であることを示唆する。ヤマグワの芽・樹皮はシーズン中に食われた分だけ減少し再生しない。M群はシーズン中に同じ場所を2-3回利用することがあり、2回目、3回目と利用頻度が増すと、その時点で利用できる芽の数は1回目比に減少する。芽は1年生枝につくので一般に細い枝が多い。これらより、太い枝を利用できないオトナの方が早く樹皮食いに移ると予想された。芽食いの頻度ははじめて利用した場所ではすべての年齢クラスで80%前後とクラス間に差はなかったが、2回目では0-1才50%前後、オトナ20%前後、3回目では0-1才30%前後、オトナ10-20%とオトナの方が低かった。採食時に利用した枝の太さは、芽食いの時の方が樹皮食いの時より細く、また0-1才の方がオトナよりも細い枝をよく利用した。その場所の利用回数と利用した枝の太さの間には明らかな関係はなかった。

より“良い餌”である芽から樹皮への餌のスイッチングの時期はオトナの方がコドモより早く、これは体重による制約が、利用できる空間を制限しているためであると考えられた。